

助産実習における学生のパワーレス状態に関する研究 —その要因と回復の促進—

石村美由紀*, 古田祐子*, 佐藤香代*

Powerless State of Students in Midwifery Practice —The Factors that Caused Powerless State, and the Factors that Encourage Recovery from the Powerless State—

Miyuki ISHIMURA, Yuko FURUTA, Kayo SATO

Abstract

The purpose of this study is to clarify the powerless state of students occurred during midwifery practice, the factors which may cause the state, and the factors that encourage the recovery from the powerless state.

We have conducted semi-structured interviews to students who have completed a midwifery curriculum in undergraduate level, while recording the contents word by word.

In result, as the powerless state of students in midwifery practice, three categories, namely “the appearance of physical symptoms”, “the mental status that was closed”, and “the behavioral suppression” have been extracted. Also, as for factors that may cause a powerless state, 4 categories, namely, “weakness of mind and body that students have”, “inappropriate educational support of educators”, “practice system that put a load on the mind and body of students”, and “the burden that practice brings” have been extracted. Furthermore, for factors that encourage recovery from the power-less state, 4 categories, namely, “resilience that student exerted”; “education force of educators that promote the empowerment”; “adjustment of living in close contact with the practice”, and “relationship with puerperal women and the newborns for whom responsible” have been extracted. Students fall into a powerless state easily during their midwifery practice. However, even if such a state occurred, it can be recovered. In order for a effective midwifery practice, it is essential to help students who have fallen into the powerless state to be recovered at the earliest, for which it is desired that teachers would conduct the training while fully understand the powerless state of the student.

Key words: midwifery, midwifery practice, powerless, education

要 旨

本研究の目的は、助産実習における学生のパワーレス状態とその状態に陥る要因、および回復を促す要因を明らかにし、助産実習における教育のあり方を検討することである。

学士課程で助産学教育課程を修了した学生に半構造化面接を行い分析を行った。

結果、助産実習における学生のパワーレス状態には【身体症状の出現】【閉ざされた精神状況】【行動抑制】の3カテゴリー、その状態に陥る要因としては、【学生自身の心身の脆弱】【教育者の不適切な教育支援】【学生の心身に負荷がかかる実習体制】【実習がもたらす負担】の4カテゴリーが抽出された。回復を促す要因には、【学生の回復力の発揮】【教育者のエンパワーメントを促す教育力】【実習に密着した生活の調整】【受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり】の4カテゴリーが抽出された。

助産実習において学生はパワーレス状態に陥るが回復することができる。効果的な助産実習のためには、パワーレス状態に陥った学生を早期に回復させることが重要である。

キーワード：助産学，助産実習，パワーレス状態，教育

* 福岡県立大学看護学部女性看護学/助産学領域
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 田川市伊田4395番地
福岡県立大学看護学部臨床看護学系
石村美由紀
E-mail: ishimura@fukuoka-pu.ac.jp

緒言

人は困難な状況にある時、自らに力（パワー）が欠如していることを認識する。このような本来持っている力を発揮できない「パワーの欠如状態」のことを「パワーレス」という。「パワーレス」はエンパワーメント理論の中で語られることが多く（清水, 1997）、「パワーレス」という概念が検討された看護研究は少ない。

看護学教育における看護臨床実習では、看護学生の多くがストレス・困難を感じていることが明らかにされている（池田, 長嶋, 2013）（井上, 戸塚, 2010）（小笠原, 吉岡, 山本, 秋山, 江口ほか, 2010）。特に疲労蓄積や看護記録, 実習展開, 患者との人間関係, 教員や臨床指導者との人間関係が, 学生のストレスに大きく関与する（池田ほか, 2013）（小笠原ほか, 2010）。ストレス・困難が大きいと, 学習はマイナス方向に導かれる。一方, 患者の病態や治療についての理解, 援助の成功体験, 患者や看護師との良好な人間関係, 看護師のプロとしての看護技術や対人援助をみることで, 内発的動機づけとなり学習はプラス方向へ導かれてゆく。

助産師教育の根幹にある助産実習では, 助産業務の根幹である分娩介助を実践するため, 看護臨床実習以上に, 知識と技術力が求められ, 助産学生の緊張が高いことが想像できる。

学士課程における助産師教育については, 過密カリキュラム（ゆとりのない教育）, 卒業時の到達レベルの低さ, 教員不足などの問題が指摘されてきた（玉里, 宮田, 白坂, 2005）。わが国の学士課程における助産師教育は, 他の教科目を読み替えた統合カリキュラムをベースに行われており, その統合カリキュラムのもと, 助産実習が展開されている。この過密カリキュラムの中で助産学生の基礎的技術力や診断力獲得を保証するためには, 助産実習を効率的に, かつ効果的に行う必要がある。

このような助産師教育の現状がある中で, 産科医不足や分娩施設の減少, 出産年齢の高齢化によるハイリスク分娩の増加などの社会的背景の変化が加わり, 助産師にはますます高度な技術, 診断能力が求められるようになった。そのため助産師教育の見直しが検討され, 2010年（平成22年）には保健師助産師看護師法の一部改正が行われた。すなわち助産師の教育年限が, 6ヶ月から1年へ変更され, 助産師教育課程における必要な単位も, 23単位から28単位

へと増加された（保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正する省令の公布について22文科高第976号, 平成23年1月6日）。

助産師教育の中で重要な位置づけの助産実習は, 実践力を求められるため, 学生にとっては常にストレスの強い環境であり, 学生は「助産実習の現実についていけないという思い」「助産実習を乗り越えられないかもしれないという思い」という否定的感情を体験する（小泉, 2008）。

助産実習において学生はしばしば「書いていた記録が書けなくなる」などの状況に陥ることがあり, 「パワーレス」状態を経験していることが予測される。パワーレス状態に陥ると, 短期間の助産実習では積極的な実習経験ができず, 目標の達成が困難となる。学生のパワーレス状況および要因を的確に把握することは, 助産師教育の柱である助産実習のあり方の示唆を得ることができる。さらにパワーレス状態に陥らず, 学生が実習中の自らの問題を自分自身の力（パワー）で解決できることが, 効果的な助産実習展開につながると考える。

そこで本研究の目的は, 助産実習における学生のパワーレス状態とその状態に陥る要因, および回復を促す要因を明らかにし, 助産実習における教育のあり方を検討することである。

方法

1. 研究デザイン

本研究は, 助産実習における学生のパワーレス状態とその状態に陥る要因, およびパワーレス状態からの回復を促す要因を, 学生の語りを通じて記述する質的帰納的研究である。

2. 研究期間

2013年3月1日～2014年3月31日

3. 研究協力者

A大学の学士課程で助産学教育課程を修了（平成24年度, 25年度）した学生11名

4. 研究協力者の募集

A大学の助産実習には, 継続ケア実習と周産期ケア実習がある。継続ケア実習とは, 開業助産師および施設助産師とともに妊娠中から1人の妊婦に寄り添い, 出産はもとより育児期（産後3か月）まで, 継続して助産ケアを展開する実習であり, 期間は4月初旬から11月末までである。周産期ケア実習は, 病産院を実習施設とし, 分娩介助を中心として退院

するまでの妊産婦・褥婦・新生児およびその家族を対象にケアを実践する実習である。期間は6月中旬頃から7月末までであり、10例程度の分娩介助を実施する。したがって研究対象者の募集は、助産実習が終了した12月より行った。まず口頭および文書にて研究趣旨、方法および研究協力者の権利について説明し、同意の意思のある者には口頭、文書、およびメールで返答してもらい、同意を得た者にインタビューを行った。

5. データ収集方法

同意を得た研究協力者の身体的および精神的負担をできるだけ感じない環境を作るため、調査日時、調査場所は研究協力者の希望に合わせた。希望がない場合は、大学施設内のプライバシーが保護される場所を使用した。また面接は、その学生の実習指導教員ではなかった研究者が行った。万が一悪影響が生じた場合は、直ちに研究を中止することとした。

データ収集は、インタビューガイドを用いた半構造化面接法で行った。助産実習におけるパワーレスの研究が少ないことから、研究協力者の立場が脅かされぬよう、その人のペースに沿ってインタビューを進めた。また、質問することによって語られる内容の偏りなどが出ないように、研究協力者から語られる流れを大切にされた。面接は原則として、1人1回とし、時間は1時間程度であった。

インタビューの内容は、以下のとおりである。

- ①助産実習の際に、自分の力を発揮できていないと感じた経験の有無、内容
- ②その要因（教員との関係、病院のシステム・雰囲気、実習体制・記録物など）
- ③自分の力を発揮できていない状況が回復したきっかけの有無、内容

6. 分析方法

まずインタビュー内容を逐語録に起こし、丹念に読み込み、語りの記述全体を把握した。逐語録を読みながら、「パワーレス状態」、「パワーレス状態に陥る要因」、「パワーレス状態からの回復を促すもの」に関連していると解釈できる語りを抜き出し、コード化、カテゴリー化を行う。データ分析の際には、その信頼性と妥当性を高めるために、データの収集・分析・解釈の過程において、研究初期段階より助産学領域の専門家によるスーパービジョンを受け、データ分析の信頼性を高めた。

7. 倫理的配慮

口頭および文書にて研究趣旨、方法および研究協力者の権利について説明し、同意の意思のある者には口頭、文書、およびメールで返答してもらい、同意を得た者のみ調査した。また、いつでも研究への参加を中止できる旨を告げ、話したくないことは拒否する権利があること、拒否しても不利益を被ることがないことを説明した。

特に不利益を被らない配慮として、助産実習が終了し、成績入力が終了した時期に研究協力依頼および研究を実施し、面接は、その学生の実習指導教員ではなかった研究者が行った。

面接場所は、研究協力者のプライバシーが守られ、精神的に苦痛のない場所が望ましいため、本人に設定してもらい、面接内容の録音は、本人の同意を得て行い、速やかに逐語録を作成した。データ処理後は直ちに録音内容を消去し、その際、ID番号をつけ、個人が特定できないように配慮した。

この研究は、福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

8. 用語の操作的定義

教育者：助産実習を担当する助産学領域の教員及び実習施設の実習担当教育者（いわゆる指導者）の助産師をさす。

パワーレス状態：本来持っている力を発揮できない「パワーの欠如状態」のことをいう。

結 果

研究協力者の学生11名の年齢（平均±SD）は、23.4±3.17歳（21歳～32歳）であった。研究協力者の全員がパワーレス状態を経験していた。「パワーレス状態」、「パワーレス状態に陥る要因」、「パワーレス状態からの回復を促す要因」についてデータを抽出し、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーを《 》, コードを〈 〉として表示した。また内容の理解が難しい部分には（ ）で補足した。

1. 助産実習における学生のパワーレス状態（表1）

助産実習における学生のパワーレス状態として、41コードから10サブカテゴリーが抽出され、カテゴリーとして【身体症状の出現】【閉ざされた精神状況】【行動抑制】も3つが抽出された（表1）。

学生たちは〈食欲低下〉〈眠れない〉〈病院を見ただけで涙が出る〉といった《身体的反応》を示

表1 助産実習における学生のパワーレス状態

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
身体症状の出現	身体的反応	食欲低下 眠れない 病院を見ただけで涙が出る 泣いてしまう	
	体調不良	腹痛 腸炎 蕁麻疹	頭痛 吐き気
	身体感覚の麻痺	周りの声が聞こえない 声（言葉）が出ない 笑顔が消える	
	体力の限界	立っているのがやっとでフラフラする 肉体的にきつい	
閉ざされた精神状況	自尊感情の低下	無力感 自信喪失 自分が一番劣っていると感じる	
	自らに向かう非難	できていないことに罪悪感 自分に対する嫌悪感 自責の念	
	抑圧された精神	先が見えないしんどさ 辛くて苦しい うつ状態 心を閉ざす 苦しさから解放されたいと願う 落ち込みが持続する どう思われるか評価が気になって不安	
	支配される感情	恐怖感 過緊張 やらなければならないことを前に焦燥感 孤独感 寂しさ 我慢する	
行動抑制	実習行動の抑制	自分の意見が出ない 行動がとれない 思考が止まる 記録が書けない どうしていいか分からず何もできなくなる 実習に行けなくなる	
	外部との遮断	外出が怖くてどこにも行けない 同じ学生と連絡を取りたくない	

し、〈腹痛〉〈頭痛〉などの《体調不良》も経験していた。ひどくなると〈周りの声が聞こえない〉〈声（ことば）が出ない〉など《身体感覚の麻痺》も現れ、《体力の限界》を感じるなど【身体症状の出現】が認められた。

また〈無力感〉〈自信喪失〉〈自分が一番劣っていると感じる〉などと《自尊感情の低下》を感じるとともに、〈できていないことに罪悪感〉や〈自分に対する嫌悪感〉〈自責の念〉など《自らに向かう非難》にも苦しんでいた。〈先が見えないしんどさ〉〈辛くて苦しい〉《抑圧された精神》や、〈恐怖感〉〈やらなければならないことを前に焦燥感〉などの《支配される感情》もあり、【閉ざされた精神状況】であった。

実習において、学生たちは〈自分の意見が出ない〉〈行動がとれない〉〈思考が止まる〉など《実習行動の抑制》と、〈外出が怖くてどこにも行けない〉〈同じ学生と連絡を取りたくない〉という《外部との遮断》を経験し、【行動抑制】状態となっていた。

2. 助産実習における学生がパワーレス状態に陥る要因（表2）

助産実習における学生がパワーレス状態に陥る要因として、47コードから11サブカテゴリーが抽出され、【学生自身の心身の脆弱】【教育者の不適切な教育支援】【学生の心身に負荷がかかる実習体制】【実習がもたらす負担】の4カテゴリーが抽出された（表2）。

〈考えすぎると何もできなくなる〉〈おおらかに

表2 助産実習における学生がパワーレス状態に陥る要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学生自身の心身の脆弱	学生のネガティブな性格的特徴	考えすぎると何もできなくなる おおらかに捉えられない性格 自信がもてない 環境に慣れるのに時間がかかる 教育者の期待に過度なプレッシャーを感じる 何 に対してもこれで良いのかと不安になる 相手を不快にさせる言い方をしてしまう 未熟なコミュニケーション力 どう思われるかと評価を気にしすぎる
	学生の身体的弱さ	胃腸が弱い 頭痛もち ストレスに弱い
教育者の不適切な教育支援	否定的な言動	否定的な言動 この時期にできていないのはダメと言われる ほかの学生と比較される 誤解されたと感じる経験
	一方的な教育	同じことを何度も言われる 記録の修正をしても、また次のコメントが入る 矢継ぎ早の質問 自分がやろうとしていたことを先に言われる
	過度な期待感	完全な知識を求められる 高い期待感をもたれること
	過度な厳しさ	厳しく言われること しっかりしなさいという言葉
	未熟な関わり	何も言わずに見ているだけ (学生が) 未熟と感じる教育者
学生の心身に負荷がかかる実習体制	教員の存在	教員の張り付き実習 (監視された感) 夜間実習における教員不在
	実習体制	24時間体制実習 夜間実習 延長実習 待機実習 (いつ呼ばれるかわからない実習) 一人実習 (相談相手不在の実習) 二人実習 (相手を思いやる余裕のない実習) 複数施設での実習 学生間 SNS 禁止の実習期間 実習そのもの
実習がもたらす負担	学生の未熟な対処能力	どんどん記録物がたまる 記録が追いつかない 実習記録に何を書けばいいかわからない 受け持ち人数が多くなると上手く調整できない 何度も同じ失敗をしてしまう そろそろ出来ていないといけない時期にできていない 知識不足のため記録に時間がかかる
	身体的・精神的な負荷	分娩の有無が予測できないことによる緊張 睡眠時間確保困難 疲労感の蓄積

捉えられない性格)〈自信がもてない)〈環境に慣れるのに時間がかかる)〈教育者の期待に過度なプレッシャーを感じる)〈未熟なコミュニケーション力)〈どう思われるかと評価を気にしすぎる)などの《学生のネガティブな性格的特徴》と、〈胃腸が弱い)〈頭痛もち)〈ストレスに弱い)など《学生の身体的弱さ》とからなる【学生自身の心身の脆弱】がパワーレス状態に陥る要因の1つであった。

教育者側の要因としては、〈この時期に出来て

いないのはダメと言われる)など《否定的な言動》や、〈同じことを何度も言われる)〈記録の修正をしても、また次のコメントが入る)〈矢継ぎ早の質問)〈自分がやろうとしていたことを先に言われる)など《一方的な教育》のほか、〈高い期待感をもたれる)など《過度な期待感》や、〈しっかりしなさいという言葉)などの《過度な厳しさ》、〈何も言わずに見ているだけ)という《未熟な関わり》など【教育者の不適切な教育支援】が抽出された。

また〈教員の張り付き実習〉〈夜間実習における教員不在〉の《教員の存在》に加え、〈24時間体制実習〉〈夜間実習〉〈延長実習〉など《実習体制》から【学生の心身に負荷がかかる実習体制】が挙げられた。

さらに〈どんどん記録物がたまる〉〈受け持ち人数が多くなると上手く調整できない〉〈何度も同じ失敗をしてしまう〉など《学生の未熟な対処能力》と、〈分娩の有無が予測できないことによる緊張〉〈睡眠時間確保困難〉〈疲労感の蓄積〉など《身体的・精神的な負荷》からなる【実習がもたらす負担】もパワーレス状態に陥る要因となっていた。

3. パワーレス状態からの回復を促す要因（表3）

助産実習において学生たちはパワーレス状態に陥っていたが、その状態からの回復も経験していた。パワーレス状態からの回復を促す要因として、42コードから9サブカテゴリーが抽出され、【学生の回復力の発揮】【教育者のエンパワーメントを促す教育力】【実習に密着した生活の調整】【受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり】の4カテゴリーが抽出された（表3）。

〈何とかなると思える性格〉〈楽観的性格〉〈出来ない自分を認めること〉〈注意されても当たり前と素直に思うこと〉など《学生のポジティブな性格的特徴》と、〈分娩介助することや実習そのもの〉

表3 パワーレス状態からの回復を促す要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学生の回復力の発揮	学生のポジティブな性格的特徴	何とかなると思える性格 楽観的性格 出来ない自分を認めること 注意されても当たり前と素直に思うこと
	実習継続の中で培われた力	分娩介助することや実習そのものに自分が慣れること 母子のことを考え身が引き締まること カンファレンスや記録での振り返りでの理解の深まり 切羽詰まった状態に追い込まれることで逆に回復すること
教育者のエンパワーメントを促す教育力	自尊感情回復につながる声かけ	厳しく言われないこと 共感的な態度・声かけ できなくても当たり前という助言（声かけ） できるようになったことを伝えられること ここまでではできていると褒められること
	優しい言葉、見守り	うまくできなかったことや恐怖心などをじっくりと聞いてもらえること 「頑張ってるね」などの声かけ 肩をトントンとボディタッチしてくれること スタッフ全体の優しい態度
	学生が奮起しやすい明確な教育	善し悪しをはっきりと伝えてもらうこと 注意をしたあとに、何事もなかったかのように接してくれること 学生に質問を投げかけた場合でも、必ず最後に正解を伝えてくれること 適度に追い込まれた状況になること（おしりをたたかれること）
	学生の状況に応じた臨機応変の教育	「いつまでに、ここまで書いてよう」と自分に合った目標を設定してくれること 自分のペースで記録を書く事を許されること 一緒に分娩を振り返りながら記録を書いていくこと 実習の進行に合わせて行う実習記録の添削と教育 段階を踏んだ分娩介助技術教育
実習に密着した生活の調整	実習体制の調整	学生が自身のペースで実習できるような配慮 休みの確保や困ったときの対処 教員と密に過ごし、しっかりと話し合うこと 実習に慣れた頃に、教員が時々実習に来ること（学生と教員間の適度な距離感） 教員と実習教育者との連携、実習調整
	生活の調整	食事や生活に関して家族のサポートがあること 睡眠時間を確保できること 実習時間以外では普段通りの生活を心がけること 読書など自分の趣味の時間をもつこと 上手に気分転換を行うこと しっかりと食べて寝ること
受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり	受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり	受け持ち妊産褥婦からの言葉・手紙 分娩を振り返っての感謝の手紙や『ありがとう』の言葉 妊産褥婦から「あなたのおかげ」と言われること 妊産褥婦と関わること 妊産褥婦新生児からのエネルギーを感じる

自分が慣れてくること)〈母子のことを考え身が引き締まること)〈カンファレンスや記録での理解の深まり)などの《実習継続の中で培われた力》が、【学生の回復力の発揮】になっていた。

また《自尊感情回復につながる声かけ》《優しい言葉、見守り》のほか、〈善し悪しをはっきりと伝えてもらうこと)など《学生が奮起しやすい明確な教育》を行い、〈自分のペースで記録を書く事を許されること)〈一緒に分娩を振り返りながら記録を書いていくこと)など《学生の状況に応じた臨機応変の教育》もパワーレス状態からの回復を促す要因であった。加えて〈学生が自身のペースで実習できるような配慮)や〈休みの確保や困ったときの対処)といった《実習体制の調整》など【教育者のエンパワーメントを促す教育力】もパワーレス状態からの回復を促す要因となった。

さらに〈食事や生活に関して家族のサポートがあること)〈睡眠時間を確保できること)〈上手に気分転換を行うこと)など《生活の調整》という【実習に密着した生活の調整】や、〈受け持ち妊産褥婦からの言葉・手紙)〈分娩を振り返っての感謝の手紙や『ありがとう』の言葉)など【受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり】が、妊産褥婦から「あなたのおかげ」と言われることが、パワーレス状態からの回復を促進する要因として抽出された。

考 察

1. 助産実習における学生のパワーレス状態

助産師教育の目的は、専門的な助産学の知識および助産技術を備え、さらに豊かな人間性を兼ね備えた助産師を育成することである。その助産師教育の根幹に助産実習が置かれ、さらに助産実習において核なるものは分娩を介助する助産技術である。

学士課程における助産師教育では、学生は7週間という集中型の実習の中で10例の分娩介助を行わなければならない。したがって限られた期間の中で目標を達成しなければならず、実習に携わる学生はもとより、教員、実習教育者は常に気が抜けない状況にある。そのような中で助産学生にはさまざまな【身体症状の出現】がみられる。ストレスや疲労が食欲に変化をもたらすことは周知されており(井村, 2012)、本研究でも同様に、学生は〈食欲低下)といった《身体的反応》を示していた。パワーレス状態になった場合には、さらに〈周りの声が聞こえ

ない)〈声が出ない)など《身体感覚の麻痺》も現れ、《体力の限界》を感じるなど【身体症状の出現】がみられた。また〈眠れない)などの【身体症状の出現】は、《自尊感情の低下》の要因にもなることが明らかとなっており(岩永, 後藤, 宮崎, 2007)、【身体症状の出現】と【閉ざされた精神状況】とは密接な関係があると考えられる。

さらに本研究においては《実習行動の抑制》と《外部との遮断》とからなる【行動抑制】が明らかになった。【行動抑制】は、学生の思考・行動すべてが完全に止まってしまい、限られた実習内では学びが期待できなくなってしまうということだけでなく、うつ状態の表れでもある。

2. パワーレス状態に陥る要因

《学生のネガティブな性格的特徴》や《身体的弱さ》など【学生自身の心身の脆弱】はパワーレス状態に陥る要因の一つである。たとえ教育者が学生のやる気を促進させることを意図しての叱咤激励や、学生が傷つかないように和ませる関わりをしたとしても、学生が緊張して自信がない場合などは、指導者の意図に反した受け止めをすることがある(竹之内, 2009)。本研究においても、学生は〈自信がもてない)〈教育者の期待に過度なプレッシャーを感じる)〈どう思われるかと評価を気にしすぎる)などの自分の性格的特徴がパワーレス状態になる要因であると自覚していた。教育にあたる際は、多様な学生の特徴を理解した上で、対応・調整していくことが重要となる。

【教育者の不適切な教育支援】には《否定的な言動》《一方的な教育》《過度な期待感》《過度な厳しさ》《未熟な関わり》があり、パワーレス状態に陥る要因となる。教育者は実習中に学生と深く関わるため、学生に及ぼす影響力が大きい。山田, 堀井, 近藤(2010)は、「思考と実践の発展を阻害する指導」が学生の成長の妨げとなることを明らかにしており、その内容には「学生を委縮させる関わり」、「一方的な指導」などが挙げられた。教育者の不適切な教育支援は、学生の成長を妨げることは明らかである。

また【学生の心身に負荷がかかる実習体制】として、〈教員の張り付き実習)〈夜間実習における教員不在)の《教員の存在》と、〈24時間体制実習)〈夜間実習)〈延長実習)など《実習体制》とが挙げられた。学士課程での助産実習では7週間で10例の分娩

介助を行わなければならない、〈24時間体制実習〉〈夜間実習〉〈延長実習〉などが必要となる。その苛酷さから学生は休みを充分に取れず、心身に負荷がかかる状況に遭遇する。A大学は実習施設を持たないため、複数の実習施設で助産実習を行っている。そのため施設によって実習体制が異なる。大学の急増に伴い実習施設確保が困難な現状がある上に（文部科学省, 2011）、施設によって分娩件数や常勤助産師数が違う。実習施設側が、実習受入の条件として、教員が実習に必ず立ち会うことを提示することが多く、教員と学生が1対1の実習となり、時に息苦しい状況に陥る可能性もある。しかし大学と施設との間で、実習合同調整会議などをもち、連携を強化することで教育効果の高い助産実習の展開は可能である。加えて学生の特徴に合った実習施設で、心身にかかる負荷に配慮した実習を調整することが重要である。

【実習がもたらす負担】は〈どんどん記録物がたまる〉〈受け持ち人数が多くなると上手く調整できない〉〈何度も同じ失敗をしてしまう〉など《学生の未熟な対処能力》と〈分娩の有無が予測できないことによる緊張〉〈睡眠時間確保困難〉〈疲労感の蓄積〉など《身体的・精神的な負荷》からなる。池田ほか（2013）や小笠原ほか（2010）も、疲労蓄積や記録が学生のストレスに大きく関与し、これらがうまくいかないと学習がマイナス方向に導かれることを指摘しており、【実習がもたらす負担】は学生のパワーレス状態を引き起こす要因と考えられる。教員は学生の未熟な対処能力に対してフォローし、負担が増強しないように調整することが重要である。

3. パワーレス状態からの回復を促す要因

助産実習において学生たちはパワーレス状態に陥っていたが、その状態からの回復も経験していた。

【学生の回復力の発揮】として〈何とかなると思える性格〉〈楽観的性格〉〈出来ない自分を認めること〉〈注意されても当たり前と素直に思うこと〉など《学生のポジティブな性格的特徴》と、〈分娩介助することや実習そのものに自分が慣れること〉〈母子のことを考え身が引き締まること〉〈カンファレンスや記録での理解の深まり〉などの《実習継続の中で培われた力》が挙げられた。《学生のネガティブな性格的特徴》はパワーレス状態に陥る要因であり、《学生のポジティブな性格的特徴》はその回復

を促す要因である。多くの人はポジティブな性格的特徴とネガティブな性格的特徴の両方を持ち合わせている。学生のポジティブな性格的特徴が優位になり回復力が発揮されるように、教員は学生に働きかけることが重要である。

【教育者のエンパワーメントを促す教育力】としては、《自尊感情回復につながる声かけ》《優しい言葉、見守り》のほか、〈善し悪しをはっきりと伝えてもらうこと〉など《学生が奮起しやすい明確な教育》、〈自分のペースで記録を書く事を許されること〉〈一緒に分娩を振り返りながら記録を書いていくこと〉など《学生の状況に応じた臨機応変の教育》、〈学生が自身のペースで実習できるような配慮〉〈休みの確保や困ったときの対処〉といった《実習体制の調整》が挙げられた。山田ほか（2010）も、学生の成長を高める教育者の関わりには、「学生の士気を高める」「学生の心情の受容」「学生の自主性の尊重」「熱心な指導」からなる「意欲を高める言葉と態度」というカテゴリーと、「わかりやすい指導技術」「考えを導く指導」「学習環境の調整」「適切な評価」からなる「思考と実践を高める教授技術」というカテゴリーの2つがあると述べている。本研究結果と類似の内容であり、エンパワーメントを促す教育力は、教員に求められる重要なスキルであると考えられる。また小泉ほか（2008）も、否定的感情を抱いた体験は、適切なサポートや他者からの承認によって肯定的感情に転化し、危機的状況の修復と乗り越えにつながることを明らかにしている。適切な教育支援があればパワーレス状態の回復は確実に促されると考える。

厚生労働省（2010）は「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」において、求められる教育実践能力には、①多様な学生等に対応する指導力、②臨地実習の中で学習を積み重ねていく学生等を形成的に評価する能力、③学生等が自らの能力開発に将来活かすことができるような客観的な評価を行う能力、の3つがあることを報告している。

学生であるため最初はうまくいかないことも、丁寧に振り返ることでその意味を理解する。経験を重ねることでうまくできることが多い（増永, 2013）。実際に学生の分娩介助技術や助産実践能力は、事例を重ねるごとに段階的に習得されることが明らかになっている（石村, 古田, 佐藤, 2009. 服部, 堀内, 谷口, 布原, 名和, 宮本, 2007. 大滝, 遠藤, 竹,

小林, 齋藤, 清水, 村本, 新道, 2012). 実習期間中にはっきり見える成長を期待するあまり, 学生に対して過度な厳しさや期待感をもち, 否定的な言動を浴びせてしまうと考えられる. 学生時代はわからなくとも, 就職して始めて納得できることや, 確実にできるようになる技術もある. 助産師教育では, その後の助産師としての役割を担うための素地を築くということが目的であり, そこを意識することが必要である. 学生は皆, 学ぶ力や成長する力を持っている. しかしその学生の特徴によって幅がある. 助産師教育にあたる教員や実習施設の実習担当教育者は, 学生の個性となる特徴を十分理解した上で, 丁寧に成長過程を確認し, 個々に適した教育を行う必要性が示唆された. A 大学では実習担当教員と学生との関係が不適切になったり, 実習担当教員の要請があった場合に, 早期に教授との面接を行っている. これにより, パワーレス状態に陥る学生が早期に是正される効果を得られるのではないかと考える.

【実習に密着した生活の調整】としては, 〈食事や生活に関して家族のサポートがあること〉〈睡眠時間を確保できること〉〈上手に気分転換を行うこと〉など《生活の調整》があり, パワーレス状態に陥りやすいと考えられる助産実習の際の生活調整は重要である.

また【受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり】には, 〈受け持ち妊産褥婦からの言葉・手紙〉〈分娩を振り返っての感謝の手紙や『ありがとう』の言葉〉〈妊産褥婦から「あなたのおかげ」と言われること〉などがあり, 学生にとっては大きな励みとなっていた. 小泉ほか (2008) も, 受け持ち妊産褥婦・新生児と関わることは, 学生に達成感や充実感, 喜びを与え, 自尊感情を高めると述べている. 助産師としてのアイデンティティは, このような体験から形成されると考えられるため, 教育者は学生が受け持ち妊産褥婦・新生児としっかりと関わっていくことができるように支援していくことが重要である.

3. より良い助産実習に向けた今後の課題

実習病院をもたない A 大学にとって, 複数の実習施設で助産実習を行うため, 教育的効果が同等になるような助産実習が展開できるよう合同調整会議などを密に開催してきたが, 実習体制にばらつきがあることは否めない. 本研究において, 学生たちはパワーレス状態に陥っており, その要因として教育側の問題が挙げられたという結果を受け, より良い助

産実習に向けての教育のあり方を検討することは必須の課題であると考えられる.

1) 学生レディネスの把握

教員は, 学生個々の身体的特徴や性格的特徴, および知識量など十分にレディネスを把握して関わるのが重要である. 学生の自尊心を低下させることなく, 学生が意欲を維持し, 成長するためには, まず学生個々の特徴を教員間で共有し, その学生に適した関わり方を丁寧にしていく必要がある.

2) 実習における教育力の向上

実習を担当する教員が教育効果の高い教授方法を身につけるために, 大学内で定期的に実習教育のケースカンファレンスを行うことが重要である. 実際に困難なケースの場合, 実習担当教員は一人で抱えず, 速やかにほかの教員と連携し, 学生の成長を促す実習が展開できるよう調整することが大切である.

また教員と実習施設の実習担当教育者との教育方針にズレがないように, 協働しながら教育力を高めしておく必要がある.

3) 信頼関係を築くコミュニケーション力

教育者の教育力はパワーレス状態に陥る要因にも, その状態から回復させる要因にもなりうる. 明らかに不適切な教育は改めなければならないが, 学生個々の身体的特徴や性格的特徴などの違いにより, 教育者の思いとは違った見解で受け止められる場合もある. よって明確に伝える・伝わるコミュニケーション力が必要である. 学生の特徴を理解し, 学生が納得できるように, 丁寧に明確に伝えることのできるコミュニケーション力を培うことが重要である. また教員は学生の教育者であるとともに支援者でもあることを学生にしっかりと伝えていくことが重要である. 学生が教員を信頼し, 一番の理解者であると判断することにより, 学習効果は高くなるのが明らかになっている (藤野, 高見, 福井, 小野, 西村, 田川, 林, 2014). したがって教員は信頼関係を築くコミュニケーション力をしっかりと身につける努力をしなければならない.

4) 教員—実習施設の実習担当教育者との連携強化

助産実習は多くの施設の協力のもと成り立つ. そのため大学と実習施設との間で, 教育目標を共有し, 学生に対する効果的な関わり方ができるような連携が重要である.

5) 実習環境の改善

学生の疲労や心理状態を把握し、心身に疲労がみられた場合は一日休日するなどの対応を行う。また実習期間中に振り返りの時間や日を作ることが重要であり、冬期休暇などを挟んで実習期間を設定するなどの工夫も有効であると考え。実習期間をしっかりと確保できる大学院での助産師教育が望ましい。

4. 本研究の限界

本研究は、A大学の学生11名のインタビュー結果をもとに分析・考察したものであり、学生のパワーレス状態を一般化するには限界がある。しかし助産実習における学生の状況は明らかとなったため、今後も継続した研究が必要である。A大学は平成27年度から大学院での助産師教育を開始する予定である。パワーレス状態に陥る要因の中でも特に、【学生の心身に負荷がかかる実習体制】や【実習がもたらす負担】に関しては改善が期待できる。本研究結果を踏まえ、大学院での助産師教育の充実を図ることが今後の課題である。

結 論

助産学教育の根幹に助産実習があり、助産実習で実践する分娩介助は、看護臨床実習以上に実践能力が求められる。

本研究において、学士課程で助産教育課程を修了した学生に半構造化面接を行い、内容を逐語録とし、パワーレス状態、パワーレス状態に陥る要因、パワーレス状態からの回復を促す要因の三つの視点から分析を行った。

その結果、研究協力者の学生11名は、全員がパワーレス状態とその状態から回復する経験をしていたことが明らかとなり、以下のカテゴリーが抽出された。

①助産実習における学生のパワーレス状態

【身体症状の出現】【閉ざされた精神状況】【行動抑制】

②助産実習における学生のパワーレス状態に陥る要因

【学生自身の心身の脆弱】【教育者の不適切な教育支援】【学生の心身に負荷がかかる実習体制】【実習がもたらす負担】

③パワーレス状態からの回復を促す要因

【学生の回復力の発揮】【教育者のエンパワーメン

トを促す教育力】【実習に密着した生活の調整】【受け持ち妊産褥婦・新生児との関わり】

教育者の役割は、学生が実習中に最大限の学びを得ることができるように働きかけることである。効果的な助産実習のためには、学生がパワーレス状態に陥らずに済むよう教育していくことが望まれるが、万が一、パワーレス状態に陥ったとしても、適切な教育支援によって早期に回復させることが重要である。

助産実習における学生のパワーレス状態、その状態に陥る要因、さらに回復を促進する要因を教員は常に意識し、学生に関わっていくことが求められる。学生個々の特徴を十分理解し、その力を引き出す教育を行うことが教育者の役割である。

文 献

- 藤野みつ子, 高見知世子, 福井香代子, 小野幸子, 西村路子, 田川晴美, 林周子. (2014). 看護学生が看護モデルとして支持する看護学実習指導者の実習指導. *滋賀医科大学看護学ジャーナル*, 12(1), 22-26.
- 服部律子, 堀内寛子, 谷口通英, 布原佳奈, 名和文香, 宮本麻記子. (2007). 本学における助産実習での学びの内容. *岐阜県立看護大学紀要*, 7(2), 3-8.
- 菱沼由梨. (2008). 臨床指導者が分娩介助初期の学生に期待する学びの構造. *日本助産学会誌*, 22(2), 146-157.
- 池田貴子, 長嶋祐子. (2013). 看護学生視点からみた成人看護学実習環境について. *日本看護学会論文集:看護管理*, 43, 71-74.
- 井村弥生. (2012). 看護学生の栄養摂取状況と生活習慣の実態調査—ストレスと欠食習慣との関係—. *関西医療大学紀要*, 6, 39-50.
- 井上真弓, 戸塚智美. (2010). 地域看護学実習前のストレスとその対処行動. *横浜創英短期大学紀要*, 6, 55-63.
- 石村美由紀, 古田祐子, 佐藤香代. (2009). 分娩介助技術の習得過程—本学での分娩介助技術評価調査より—. *福岡県立大学看護学研究紀要*, 7(1), 18-28.
- 石村美由紀, 古田祐子, 佐藤香代. (2014). 助産実習における学生のパワーレス状態からの回復に必要な要因. *母性衛生*, 55(3), 205.
- 岩永喜久子, 後藤有紀, 宮崎晴佳, 増本紘子. (2007). 学部教育における看護学生のメンタルへ

- ルスと関連要因. *保健学研究*, 20(1), 39-48.
- 小泉仁子, 太田奈美, 宮本眞巳. (2008). 学士課程の助産学生の職業アイデンティティの形成過程について—助産実習での体験に焦点を当てて—. *医療看護研究*, 4(1), 64-71.
- 厚生労働省. (2010). 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書について. 平成22年2月17日. 厚生労働省医政局看護課
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/s0217-7.html>
- 増永啓子. (2013). スタッフと学生の学ぶ力を引き出す助産実習. *助産雑誌*, 67(8), 630-633.
- 文部科学省. (2011). 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正する省令の公布について(通知). 22文科高第976号, 平成23年1月6日.
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/1305957.htm.
- 文部科学省. (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, 平成23年3月11日. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm
- 野崎真奈美. (2013). 現代の学生の特徴と対応の留意点. *助産雑誌*, 67(8), 634-637.
- 小笠原知枝, 吉岡さおり, 山本洋美, 秋山 智, 江口 瞳, 片山はるみ, 長谷川智子. (2010). 看護学生の臨床学習環境とストレス・コーピングに関する実態調査研究. *広島国際大学看護学ジャーナル*, 7(1), 3-13.
- 大滝千文, 遠藤俊子, 竹 明美, 小林康江, 齋藤益子, 清水嘉子, 村本淳子, 新道幸恵. (2012). 助産学実習における助産実践能力の習得に関する研究. *母性衛生*, 53(2), 337-348.
- 清水準一, 山崎喜比古. (1997). アメリカ地域保健分野のエンパワーメント理論と実践に込められた意味と期待. *日本健康教育学会誌*, 4(1), 11-18.
- 竹之内聡子. (2009). 看護学生への臨地実習におけるユーモアの効果. *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録*, 34, 86-92.
- 山田知子, 堀井直子, 近藤暁子, 渋谷菜穂子, 大橋幸美, 上田ゆみこ, 江尻晴美, 丸山尚子, 足立はるゑ. (2010). 看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり. *生命健康科学研究所紀要*, 7, 13-23.

受付 2014. 10. 14

採用 2015. 1. 8